

創立100周年記念号

全世界に出て行って、すべての造られたものに
福音を宣べ伝えよ。

(マルコによる福音書16章15節)

—— 戦後のキリスト教教育の歩み ——

幼稚園に於ける キリスト教教育

幼稚園園長 荒牧 富士子

東洋英和幼稚園のキリスト教教育の歴史は今から70年前に始まった。今年創立100周年を迎えた東洋英和女学院がその創立30周年のおり、それを記念して東洋英和が幼児にも教育の種を蒔いたことになる。初代の園長はミス・ブラックモアで当初はまだ既在の保育部の前身上田にあった。教育の専門的な立場から本格的にキリスト教教育がされたのは大正8年上田の梅花保母伝習所が東洋英和に合併されてミス・ドレークや主任保母が上田からやって来てからではないかと思う。

70年史を見ると「ミス・ドレークはフレーベル主義によって宗教的情操陶冶を行うとともに云々……」と記されているが、これは多分当初の他のキリスト教幼児教育の礼拝の場の写真にもあるように円く輪になってともに祈り、ともに讚美し、

ともに聖書のことばを語んだりして、それに、ひきつづいてフレーベルの「母のうたと愛撫のうた」に出てくる指あそびや歌などを歌ったりして楽しい雰囲気の中で朝のひとときを過した。それがその宗教的陶冶といわれるものの一部分では



幼稚園 チャペル アワー

ないかと思う。所謂、朝の集会、モーニングサークルである。そしてその傍、「進んでプロジェクト・メソッド project method などを研究して保育法に取り入れ」とも70年史には記してあるが、このことが礼拝のなかの強調点とそれを生活のなかに流してゆく一つの方法として用いられたのではあるまいかと思う。

このような生活のなかでその毎日の繰返しが、こどもたちの知識欲を伸ばし、好奇心や探究心を育て、神さまに対する感謝や他人に対する思いやりの心が、目に見えないところで育てられていたのではないだろうか。教育は同じところに根を下し、その理念がそこで繰り返されていくところに次第に花開くものである。

東洋英和幼稚園でも又それは例外ではなく、年を経るごとにこのようなキリスト教信仰による保育は、内容も、充実し、保育者のモーニングサークルなどに対する準備も周到なものであったに違いない。こどもたちにとってもこの朝の輪は楽しいものであり、まず神に感謝を捧げて後に続いてあるリズムやゲームなど夢中になって参加したに違いない。司会の先生に名前を呼ばれて輪の真中に出ていくのも誇りであったし、拒否する内気なこどもも、友だちのなかで次第に名前を呼ばれることを楽しみにしたようである。幼稚園は人数も少なく、1人の司会者和其他の保育者、そして3才から学令前までのこどもたちが集っても50名前後のものであったから礼拝のときに司会者が休みのこどものために祈れば、それは皆の祈りでもあったろうし、感謝すべきことも司会者によって祈られれば皆の心に通じる感謝であったに相違ない。そして、この礼拝での保育者の思いが1日の保育の流れのなかに常に浸み透り、保育者とこどもたちは一体になってキリストの愛を身近に感じていたのであろう。

さて、このような基礎の時代に基礎固めがあり、代々のそこに使命を感じておられたベテランの保

育者が卓越した手腕と深い信仰から出る教養により礼拝からキリスト教教育のエッセンスを醸し出したことであろう。その後続く歌やリズム、ゲームはこどもたちの心に伝わったものが身体のなかで具現されたものとしてあったに相違ない。この方法は正統より昭和初期までずっと続いた。こどもが次第に教を増し一斉に保育をしなければならぬ保育の場は70人80人とふくれあがってきた。昭和29年発行の70年史は当時の幼稚園の主任、高崎(旧姓高橋)千恵子姉は園の目標と宗教生活を次のように記している。

目標 神さまに祈れるこども、体の丈夫なこども、自分のことは自分でするこども、きまりを守れるこども、迷惑をかけないこども、自由に考え自由に表現できるこども。

と記し、宗教生活として1.神さまへの礼拝の態度を養う、2.自然物を愛する心を養う、3.自分以外のものへの親切と協力心を養う。これは70年過ぎた幼稚園のキリスト教教育と80年へ向かって歩む幼稚園のキリスト教教育の一つの確認ではないだろうか。過去もこのように歩んで来ました、将来もまた、そのように歩みたい、ということを作成文化するとこのようなことばの表現になるということだと思う。このようにしてキリスト教幼児教育の上では何を何時までどのようにして教えるか。というような小学校以上のキリスト教教育と異なるのでときどきしっかりと保育者が今しているキリスト教教育の組立てをし、生活のなかにいろいろなこどもたちの経験の入り込んでいる保育の業を区分けしてみないと、自分のやることが見えてこない部分が多分にある。

こんな模索は戦争の混乱時代に根気よく続けていた幼稚園のキリスト教教育のなかで少しずつ新しい方向と合せて始められた。そしてこのころ再び帰って来られたカナダ宣教師で教育専門の勉強をされたミス・スクルトンや、また少し後になっ

てアメリカの宣教師ミス・ジュティーンなどが長い伝統を持つ幼稚園のキリスト教教育に新しい次代の風を吹き込む役目をされた。

前にも述べた初期のころに始まって長い伝統になっていた朝の礼拝を一日のプログラムの極く大切な時間帯に置き、相当な準備と時間をとっていた。当時は多分これをしなければキリスト教の幼児教育ではない。それと同時に最も危険なことは長く長く繰り返しているうちに最初の目標はどこかにいってしまっただけをなすことの大きな意義を忘れ、惰性に陥るといふ危険はなかったかどうかと思う。大正・昭和初期ののんびりした時代から敗戦の前後の虚脱・空虚の時代、その時になって日本が経済成長の一気に昇り坂にあるとき、キリスト教教育はどのような人間の有り方を子どもに指示していただろうか、これはもう礼拝をする、しない、の問題ではない。礼拝を必ず朝の決まった時間に行なうということよりも、まず、一日の教育のなかにキリスト信仰の証しがされ、神と隣人を愛することの大切さが指し示されていたかどうかか問題であった。

東洋英和幼稚園にとってはこの危惧は余りなかった。温かく行き届いたキリスト教教育は健全に続いたがどの時代でも同じようにそこにある保育者が交替をするときあらたな問題が浮びでてくる。そして、昭和30年代から40年代にかけて、今までのキリスト教教育の礼拝の持ち方、そしてその内容は、伝統、伝統と継続するうちにすでに当初の生き生きとした生命を無くし形骸化した面が無いとはいえない。形だけが伝わってきているものは外側のものだけを見て中身については考えず、子どもたちの前で礼拝がされはしないだろうか。そのようなとき、子どもは本当に礼拝に参加するだろうか。聖書の話に本当に耳を傾けているだろうか。讚美を心からしているだろうか。祈りのことばに対して心からのアーメンを唱えているのだろうか。そして何よりも憂慮されるのはそうした

なかで保育者は子どもたちの心が見えているのだろうか。という反省がおきてきてキリスト教保育としての全体（礼拝をも含めて）を考えなおすことが必要となり、当時の保育者は礼拝にも生活にもいろいろな試みをした。

例えば、礼拝は園中でやっていたものを週のうちに4才児の合同、5才児の合同、また組別の礼拝などで、何か行事のときには一緒になる。礼拝は、リズムや歌やゲームとは切り離して簡潔に行う。また、子どもの遊びの発展を見たときには必ずしも定めた時間に礼拝をすることはしない。等々。他には小さな子どもの経験一つ一つにそのような配慮がされ、子どもの生活のなかに子どもが神を見出せるような状態になった。これは東洋英和幼稚園のキリスト教教育の進歩であり革新と云えよう。しかし今や、キリスト教幼児教育にはそして東洋英和幼稚園には、或る特定な環境の子どもたちや、特定な縁故関係の子どもたちだけでなく、どんな環境に住んでいる子どもでも縁故のない子どもたちでも受け入れて喜んで迎えキリストの祝福をのべるチャンスが与えられている。そしてどの子どもたちも新しい時代のよいものも悪いものも平等に影響を受け、またこれからも受け続けるであろう姿で入園してくる。社会は子どもたちを神の姿から遠ざけ、生物や植物、そして身の周りの人々の生も死も近く感じることでできない状態に置いている。物や人々に対する感謝や思いやりは極く一部の人たちを除いては失せ、物質だけを我が喜びとする人たちの増え続ける時代に、東洋英和のキリスト教教育は大変な使命を負っているように思う。そのためには今東洋英和幼稚園は下記のようなことを柱としながら、そして実行しつつ模索しつつ毎日のキリスト教教育をしている。

1. 生活のなかで神の愛を知る

自然のいとなみを通して（生と死）

人間関係を通して（保育者、教会、家庭の両親、親戚、社会の人々）

- 探究する生活、表現する生活、を通して
2. 神とキリストをこどもに語りつづける
聖書より語りかけ給う神のみこころを知る。
救主キリストの一生を知る。

3. 神との交わりは創造的に、
チャペル・アワー参加、一緒の礼拝の形式をいろいろな型にし、こどもの礼拝に対する考えを流動的にする。

戦後、小学部に於けるキリスト教教育は どのようにおこなわれたか

小学部教諭 伊藤博正

「校名が、東洋英和附属初等学校から附属を外して、東洋永和初等学校になったのは敗色濃い20年6月ごろでした。疎開地で校長就任式をとり行ったりしたが、幾ばくもない8月15日の終戦を迎えることとなり、10月下旬には1年有余の山間の疎開校を解散して帰京。11月初め、焼失を免れた記念講堂に集まり、声高らかに讃美歌を歌って礼拝をはじめ、学校再開した。この感激は忘れ得ぬものとなった。翌年、校名を歴史的な「英和」に戻し、東洋英和初等学校としたが、ほどなく六三制に学制改革があって、昭和22年女学校は中等部と高等部に二分され、小学部と共に三部制となって名称も現在のものに落ちついた。(元小学部部長 外崎三郎先生の文より、小学部発行「めぐみ No. 74」)

戦後、再び5日制に復し、「キリスト教教育の徹底を期するために、土曜日を休日として、日曜日には全児童、教職員が最寄りの教会学校並びに教会に出席する慣習の形成を望んでいる。そのため毎年4月、各々の教会学校に児童受け入れを依頼している。……」と、入学案内に記してある。

礼拝は、毎朝守られた。週5日のうち、全校礼拝4回、クラス礼拝1回の形が昭和34年(1959年)まで行なわれた。1950年まで三学期制で各学期の始業式、終業式、入学式、修業式、卒業式は、礼拝の形式で行なわれ、讃美歌が歌われ、聖書が読まれ、お祈りがあり、部長の話があった。特別

礼拝として、母の日、花の日(子どもの日)、感謝祭、クリスマスの礼拝が守られた。受難日礼拝と復活祭礼拝も学期中に守れるときは行なわれた。次に特別礼拝がどのように行なわれたかを記してみる。

母の日礼拝

5月第二日曜日の前後、前週の時は、金曜日。後の時は火曜日か水曜日に特別時程により午前10時10分より11時30分まで母親の出席を求めて行なわれ、昭和22年はミス・コーテス、昭和24年からは村岡花子先生をお招きしてお話していただいた。先生には、午後の母親有志との懇談会にも出ていただいた。礼拝の中で、児童の作文朗読(10~12人)や児童及び母親代表の献文もされた。村岡先生には、その後毎年お話をお願いし、ご召天される年まで続いた。昭和32年から40年まで献金は、乳児園などに送られた。

花の日礼拝

昭和21年より6月第二日曜日の前後、特別時程により午前10時30分より11時40分まで行なわれ、高田彰牧師、木村義夫牧師のお話があり、絵ばなし、手品など楽しい番組も加えられ、児童が持ちよった花は花束とされ、カードと共に近隣の病院、保健所、消防署、警察署、交番、郵便局、駅、都電の車庫へ児童代表によって届けられた。

昭和30年母の日、花の日の礼拝プログラムと花の日のカード、慰問先を「小羊」より転載する。

感謝祭礼拝

昭和23年より毎年11月25日に、昭和32年からは20日前後に行なわれ、児童は家より野菜や果物をもってきて壇上に飾り礼拝の後、5、6年生が幾組かに分かれて献げものを持ち教師と共に各所へ見舞に行った。病院や施設で挨拶したり、乞われて讚美歌を歌ったりして喜ばれた。

以下は、昭和30年「小羊」より児童の作文を引用する。

浴風園をお訪ねして

6年 肥田 章子

皆が少しずつ持ち寄った秋の果物が講堂に美しくかざられ、感謝祭の礼拝を行いました。午後から5、6年生はその果物を持って養老院、児童収容所等へ気の毒な方々をお慰めに行くのです。あいにくと小雨が降っていましたが、私達6年生数人は先生方に連れられて養老院の浴風園にむかいました。渋谷から井頭線で高井戸駅で下車し、それから雨の砂利道を15分程歩きやっと浴風園と叫ばれんが造りの大きな門に着きました。私達は婦長さんの御案内でお部屋を廻りました。一室に12、3人位ベットのねていらっしやいました。私達は果物を差上げ讚美歌を歌いましたが皆さんとても喜んで下さいました。2番目の部屋にはもと英和の校医をしていらした村上先生がいらっしやいました。先生は大変年をとっていらして耳も遠く体も不自由らしくねたままでしたが、その声だけはとても明るいひびきをもっていました。それからいくつかの部屋をまわり、おいとまして外に出るともう暮色が濃くなっていました。

クリスマス礼拝

一部 礼拝、二部 祝会、そしてプレゼントと会食、と午前中を費やして二学期の最後の日に行なわれた。牧師による奨励が何年かなされ、その

今年の特別礼拝(記録)

母の日礼拝
五月十二日(祝)

一献	日守 幸子	一献	日守 幸子
二献	日守 幸子	二献	日守 幸子
三献	日守 幸子	三献	日守 幸子
四献	日守 幸子	四献	日守 幸子
五献	日守 幸子	五献	日守 幸子
六献	日守 幸子	六献	日守 幸子
七献	日守 幸子	七献	日守 幸子
八献	日守 幸子	八献	日守 幸子
九献	日守 幸子	九献	日守 幸子
十献	日守 幸子	十献	日守 幸子
十一献	日守 幸子	十一献	日守 幸子
十二献	日守 幸子	十二献	日守 幸子
十三献	日守 幸子	十三献	日守 幸子
十四献	日守 幸子	十四献	日守 幸子
十五献	日守 幸子	十五献	日守 幸子
十六献	日守 幸子	十六献	日守 幸子
十七献	日守 幸子	十七献	日守 幸子
十八献	日守 幸子	十八献	日守 幸子
十九献	日守 幸子	十九献	日守 幸子
二十献	日守 幸子	二十献	日守 幸子



花の日礼拝
六月十五日(祝) 二時三十分

一献	日守 幸子	一献	日守 幸子
二献	日守 幸子	二献	日守 幸子
三献	日守 幸子	三献	日守 幸子
四献	日守 幸子	四献	日守 幸子
五献	日守 幸子	五献	日守 幸子
六献	日守 幸子	六献	日守 幸子
七献	日守 幸子	七献	日守 幸子
八献	日守 幸子	八献	日守 幸子
九献	日守 幸子	九献	日守 幸子
十献	日守 幸子	十献	日守 幸子
十一献	日守 幸子	十一献	日守 幸子
十二献	日守 幸子	十二献	日守 幸子
十三献	日守 幸子	十三献	日守 幸子
十四献	日守 幸子	十四献	日守 幸子
十五献	日守 幸子	十五献	日守 幸子
十六献	日守 幸子	十六献	日守 幸子
十七献	日守 幸子	十七献	日守 幸子
十八献	日守 幸子	十八献	日守 幸子
十九献	日守 幸子	十九献	日守 幸子
二十献	日守 幸子	二十献	日守 幸子

後部長がしたり讚美礼拝となったりした。二部は、各学年からのだしもの合唱があったり劇があったりし、全学年より参加の降誕劇ページェントをし、サンタクロースが登場して贈りものが届けられ、会食して楽しい一日を過ごした。昭和31年からは、カンタータがおこなわれた。献金がなされ、クリスマスカードとともに各所に送られ、一部は児童が直接、見舞に訪れた。サンタクロースのプレゼントは児童に、とても喜ばれた。その様子を伝える作文が「小羊」に記載されている。そして当時の児童教会出席一覧も記録されている。

イースター礼拝

昭和30年より36年まで献金が献げられ、日本基督教団の克己献金、世界日曜学校大会、世界キリスト教教育大会などにおくられた。

昭和29年、現在の小学部校舎が完成して移転。

1学級40名、12学級になった。少数教育から児童数の増加、新しい教育観や宗教教育に対する反省から礼拝の方法が変えられていった。

小学部の全校礼拝は、毎朝30分間守られてきた。戦後は全校4回、クラス1回で守ってきたが、昭和35年から、週1回低学年礼拝と高学年礼拝が隔週交互になされ、昭和36年から38年まで全校2回、クラス1回、低と高学年礼拝各1回となった。

昭和39年、40年になって、全校礼拝は月曜と金曜の2回(25分間)、クラス礼拝は水曜日、火曜日はクラス小羊会、木曜日は5分間の各教室での礼拝となった。

昭和41年は、月曜日はクラス小羊会。火曜日は全校礼拝、水曜日は教室毎の礼拝、木曜日はなし。金曜日はクラス礼拝となった。全校礼拝は主に部長が担当して、イエスキリストの生涯と教えを聖書を通して奨める。クラス礼拝では、1年(礼拝教育と旧約アブラハムの一生涯まで)、2年(旧約イスラエルの民のエジプトでの苦難まで)、3年(モーセの一生と砂漠の旅)、4年(イスラエル王国の建国まで)、5年(使徒行伝 教会の誕生と使徒のはたらき)、6年(新約聖書より、日々の出来事に目を向けつつ聖書の光をうける)この年は、礼拝のカリキュラムを大きく定め、それを試行しつつ、戦後ずっと続けてきた、朝の全校礼拝を週1回とし、更に、特別礼拝は礼拝と献金のみとして諸行事はすべてカットした。その理由として、教会の諸行事に新鮮な気持ちで参加しにくい。諸行事とその前後に要する時間が授業時



小学部 クリスマス祝会(昭和30年頃)

間にくいこむ事があげられている。

この前後は、児童の教会学校への出席を強くすすめ、児童の出席、教会が定まると部長名で依頼書を送り、担任名を返事していただく。クリスマスにはカードをお送りする。CS教師との懇談会を年2回、6月と2月に開いて、各教会との連絡、児童への伝道、キリスト教教育について懇談したり学び合ったりした。全児童の出席教会の一覧は毎年づくり、年によっては出席状況の統計までとった。

昭和45年より、月曜日の朝礼時に奨めない全校礼拝をもち、全校礼拝は水曜日、クラス礼拝は金曜日とした。全校礼拝の奨励は、毎月第一週は部長、他はキリスト者教師が順番につとめ、福音書、詩篇、旧約予言書などにより、イエスキリストの生涯と教えを教会暦にそって目標をたて礼拝の奨励をする。クラス礼拝は、1~4年は礼拝教育と旧約の歴史をとおして神の導きと人の罪と信仰を学び、5年は使徒行伝、6年は新約各書よりイエスキリストへの信仰を学んでいく。日々の祈りとして、各クラスの朝の時間と終礼時、教師または児童の祈り、聖書、讃美歌も適時用いる。昼食時には食前の祈りをする。特別礼拝として、アドベント、クリスマス、受難日、イースター、母の日、ペンテコステ、キリスト教教育週間、収穫感謝祭をした。このほか、始業、入学、終業、修業、卒業、運動会などで礼拝を行なう。日々の児

1950年(昭和25年)別科別礼拝表	
<p>①クリスマス献金 頭 5万七千四百七十三円 後 5万四千四百七十三円 毎の会 七千四百</p>	<p>②クリスマス献金 頭 5万七千四百七十三円 後 5万四千四百七十三円 毎の会 七千四百</p>

童会活動や教職員の集まりもはじめと終わりは祈りの時をもつ。昭和2年よりはじめられた夏期学校の朝と夕べの礼拝、食事の時の祈りなど、生活をとおしてキリスト教教育をしようとしてきた。追分寮ができ(昭和34年)追分での生活は、年々の積み重ねもあって児童に神と共に過ごす、す

すばらしい恵みを味わせてくれるようになった。数年に互る検討の結果として、昭和48年(1973)「キリスト教教育」のカリキュラムが出来、それによって現在まで、小学部のキリスト教教育がすすめられている。

戦後の宗教教育を担当して

日本基督教団・三軒茶屋教会牧師 奥 興

私が東洋英和につとめたのは、1948(昭和23)年から、1957(昭和32)年にカナダに留学するまで、足掛け10年(9年間)であった。当時、教会の牧師をしていたが、教会も戦時中の荒廃から戦後の復興に向かっていたため、私自身にとっては、経済的に生計の支えとなっただけでなく、教会にとっても英和の生徒が多数通うようになった。又、他方、一つのローカル・チャーチの牧師としての現場に働きつつ、学校の宗教主任としてつとめることによって、教会のわざとしての福音を、教会から直接に学校に伝えることができたことはよかったと思っている。

教会の牧師でありつつ、学校の宗教主任をつとめることは、かなりの激務であった。しかし、不十分なながらも、それができたのは、今にして思えば、まだ年若く、精力的に働けたのだと思う。私が就任した1948年の1ヶ年は、講師として、主として高等部の聖書科を担当したが、その前年から、新制中学校制度の実施、この年からは、新制高校が実施されるといった過渡期であり、特別教科としての校友会も改正されたが、宗教部がその筆頭に置かれ、又、生徒の教会出席に備えるために、教会の礼拝と同じ形式で土曜学校をするなど、宗教教育に力を入れることができた。

私は、翌1949(昭和24)年から専任とな

って、中等部、高等部、保育専攻部の聖書科の授業を担当することになり、毎朝の礼拝のほか、中・高では、土曜学校の代りに、毎水曜日の朝の1時間、特別礼拝を行なうようになった。又、校友会宗教部の生徒たちの毎金曜日の早天祈祷会、週1回の教職員の早天祈祷会、年2回の中・高全員の修養会、夏の修養会などを行ない、やがて、土曜日を休日として、日曜日の教会出席を奨励した。教職員には、幼稚園から保育専攻部までの全学院の教職員の参加を期待しつつ、毎月1回の全院祈祷会を行なった。外来の牧師、その他、キリスト教界より講師を招くなどして、全学院の教職員が聖書を学び、生徒の宗教教育の徹底を計るために先ず教師自らを互に切磋琢磨し、豊かな交わりを与えられたことは有意義であった。日頃、接することの少ない各部の教職員が、一堂に相会して行なったクリスマス礼拝と祝会などは楽しいひとときであった。

『東洋英和女学院70年誌』<1954(昭和29)年12月発行>に、「宗教教育70年」と題して、当時の宗教教育について—修養会、礼拝、早天祈祷会、校外活動と奉仕、聖書の時間、コイノヤ<注=1950(昭和25)年発足した信者の集い>、宗教委員会、全院祈祷会などの項目に分けて—私の記したものがあるので参考

にしていきたい。

少しく個人的なことになるが、当時は、中・高の校舎に本部事務室があり、院長の長野彌先生と中・高教務主任の井上健之助先生の他は皆、女の先生たちで、従って、教員室で井上先生の隣りに席を与えられた私は、先生と話し合う機会が多くキリスト教教育について、——特にキリスト教について、教会とか伝道などについて——熱心に話し合い、放課後など、時を忘れておそくまで議論したことを思い出す。後年、先生は鳥居坂教会にて受洗されたが、それは私にとっても大変嬉しいことであった。「君のおかげだよ」と謙虚に感謝されたその時の先生を、今も彷彿として懐しく思い出す。院長の古い友人であり、実によい助け手としての井上先生の事務的手腕や毎日のようにコツコツときれいな細い字でガリ版書きをしておられた先生との出会い、そして、毎日隣り合った席にいて接した先生との人格的ふれあいは、先生より若年の私にとって学ぶところの多い思い出深いものであった。もとより長野先生にも多くのことを学んだ。先生の行き届いた様々な心くばりに感服させられた。そして何よりも、本郷中央教会の礼拝を欠かすことなく、忠実に仕えられたことは、そのこと自体が信仰の証しであり、素晴らしいことであった。その他、すべての先生方に親切にしてください、多くのことを学ぶことができ、心おきなく宗教教育を推進できたことは幸いであった。



最後に来日したときのヘレン ケラー女史(左端)と村岡花子先生(中央) 1955年

やがて、男の先生たちも次々に就任し、田浦武雄、山崎保興、三宅彰などの諸先生などと、理科の実験室で祈祷会をしたことなどは、知る人は少ないであろう。小学部長の外崎長三郎先生とも親しくお交わりを頂いた。先生は鳥居坂教会の熱心な会員として仕えられ、主な礼拝を厳守しておられた。宣教師の先生方の存在は、英和の支柱であることは申すまでもない。カナダの婦人ミッションから遣わされて、生涯日本伝道のために一身をささげておられる先生方には、常に頭のさがる思いであった。ミス ダグラス、ミス マッシューソン、保育科のミス ローク、ミス スクルートン、ミス ハミルトンなど、皆戦後來日、あるいは再来日された先生方で、温い交わりを頂いたことはすばらしい特権であった。その他、多くの先生方との交わりを与えられたことは、英和につとめた者として得た大きな賜物だったと深く感謝している。こうした全学院の先生方の祈りの中で、戦後の過渡期にあった宗教教育を、その建学の精神にそって進めることができたと思う。生徒たちは純真であり、素直で、教室でも礼拝でも、何の困惑することもなく楽しく過したと思っている。

東洋英和を東洋永和と変えるなど、戦時中を頂点とした、圧迫された時代から解放されて、声高らかに讚美歌をうたい、福音を誰にでも語れる喜びと、多くの人々が「鹿が谷川を慕いあえぐように」聖書によって語る言葉に傾聴、又は少なくとも関心を示してくれる——物質的には今ほど恵まれていなかったが、精神的には恵まれた——心豊かな時代だったからかも知れないと思うのである。

『75年誌』に記したので、それと重複することをさけたいが、日本のキリスト教界の多くの牧師、指導者の応援を得て、外来講師としてむかえ、修養会、講演会などを数多く開催したことも幸いであった。1951(昭和26)年2月、スタンレー ジョーンズ博士の講演会を開催し、「人生における四つの選択」と題して話されたとき、教

十名の生徒たちが入信の決意を表明したこと、さらに、来日された晩年のヘレン ケラー女史による感銘深い講演会と、その時のヘレンの内面からあらわれた美しいお顔など、忘れ得ぬものがある。こうした内外のクリスチャン指導者の人格を通して、キリストの福音に接することのできたことは、生徒たちにとっても幸いなことであった。

今はなくなってしまった青楓寮について記すと、中・高生数名の他は、ほとんど保育専攻部の学生が寮生活をしていて、川尻先生が寮監をしておられ、山崎まつの姉が手伝っておられた。宣教師館の隣りにあった青楓寮では、毎日礼拝が行なわれ、私も時折、特別な機会に招かれて奉仕した。家庭的な温い雰囲気のあるような寮生活は、今日のように学校の規模が大きくなった時代には味わえないものとなってしまったと思う。はじめは寮と同じ場所で保育専攻部の授業をしていたが、1950（昭和25）年、短大保育科として発足し、やがて英文専攻科が発足（1953年）、翌年から短大英文科となり、校舎も新たにつくられた。私は保育専攻部時代と短大になって、英文科が併設された時代に、一般教育科目の専任となり、倫理と宗教を受持ち、中・高とかけもちで時間数も増えたが、短大の草創期に、退職するまでの8年間、キリスト教保育など、特定の使命をもって立とうとする学生たちや、英和の高等部を卒業した人々を主とした英文科の学生に、さらに続いて教えることができたのは、よい経験であった。

当時の聖書科のテキストは、自分でノートをつくり、聖書全体を在学中に学べるようにしたが、やがて、キリスト教教育同盟でテキストをつくり、それを用いるようになった。ちなみに1955（昭和30）年の聖書科カリキュラムを記す。

中Ⅰ キリスト教入門（キ教教育同盟編『豊かな生命』） 担当 吉本てう



北九州炭坑地へ 井上健之助先生（左側）と奥興先生（右から3人目） 1954年

- 中Ⅱ 旧約聖書（前期）（同盟編—『イエスの生まれるまで』） 担当 丸山民子
 中Ⅲ 旧約聖書（後期）（同盟編—『イエスの生まれるまで』） 担当 ダグラス
 高Ⅰ 新約聖書（同盟編—『イエスと使徒たち』）
 高Ⅱ キリスト教史（同盟編—『教会と文化』と柏井園著『キリスト教小史』）
 高Ⅲ 神学入門（山谷省吾著アテネ文庫—『新約聖書辞典』と自作ノート）
 短大英文科Ⅰ 小塩力著『聖書入門』
 “ “ Ⅱ 斉藤勇著『キリスト教思潮』と自作倫理ノート
 短大保育科Ⅰ 旧約聖書入門（自作ノート）
 “ “ Ⅱ 高倉徳太郎著『福音的キリスト教』と波多野精一著『キリスト教の起源』高等部と短大 担当 奥 興
 （短大は別に宣教師による福音書があった。）

なお、中・高それぞれの毎水曜日の1時間礼拝は教会暦にそった聖書日課を用いて説教し、毎朝の礼拝（15分間）は、先生方が輪番に担当し、YWCAの日課を用いた。又、宣教師の先生による英語の礼拝も行なわれた。尚、当時の調査では、全校生徒の約1割が受洗者（中・高では890名中90名が受洗者）であった。

あなたのパンを水の上に投げよ

伝道の書11-1

青山学院女子短期大学講師 水野 誠

奥興先生の後を承けて私が東洋英和のキリスト教教育の責任を持ったのは、1956年4月からで、63年に母校青山学院の神学科にキリスト教教育のコースを形成するため呼び返されて、後髪ひかれながら英和を去るまでの7年間だった。赴任する時既に、英和(中・高)の宗教教育は、毎朝の礼拝の外に、キリスト教学校教育同盟のカリキュラムに従った週1時限の聖書科の授業と、学校暦と教会暦を含む特別行事と、生徒のボランティア活動としてのYWCAや受洗した人達のコイノニアなどのグループによってなされていることを知らされていた。其の後全校的な生徒の参与を期待していたクラス選出の委員による「宗教活動協議会」RACが組織され、また個人指導の充実の必要を感じてカウンセリング・ルームを設けたりしたので、それらの各々にわたってスペースの許す限り幾つかのトピックスを拾いながら述べてみたい。

聖書科

中1-キリスト教入門、中2-旧約、中3-新約、高1-教会史、高2-倫理、高3-教義(キリスト教思想)、というのが同盟のカリキュラムの大綱だった。

英和就任と同時に、同盟の関東地区宗教教育分科委員に選ばれ、既に凡そ出来上がっていた聖書科新カリキュラムの作成に参画し、また教科書編纂委員として高2用の溝口靖夫氏による『キリスト教と人生』の編集に協力した。当時日本のキリスト教教育は、宗教心理学的傾向の強かった宗教教育から、弁証法神学の批判を強く意識した戦後

の転換期にあって、教科書の書替えがなされたと
思うが、時代の変化も子供たちの生活の現実も殆ど無視して此のシリーズは随分長く用いられているようだ。英和では、高1・高3用は殆ど用いなかった。

生徒達は最近私が教えている学生達よりずっと responsible で、質問も反発もまともに教室で表現したから、時には生徒と教師の知恵比べのような事もあって、授業は楽しかった。上級生のクラスではグループ毎に課題を選ばせて研究発表による授業をすることが多かったが、今そのレジュメを読んでみるとかなり背伸びして難解な神学書や注解書を読んで高度な内容の発表をしたものも多い。ユーモラスな思い出も少なくない。レポートの盗作も時々あったが、或る時予言者の名前を間違えて書いたばかりに、それを写した仲間達を芋蔓的に摘発したこともあった。先日卒業25周年のクラス会に招かれて、その張本人から当時の思い出を大変懐かしく聞いたものである。

特別行事

通常宗教行事とは呼ばれない学事暦による式典や新入生オリエンテーションなども礼拝形式で行われるが、RACが発行した『宗教活動案内』には、特に宗教行事として受難節、復活節、花の日、高3特別修養会、中1特別修養会、夏期修養会、YWCAカンファレンス、キリスト教教育週間、追悼記念礼拝、創立記念礼拝、世界祈禱週、感謝祭、待降節、クリスマス、卒業礼拝、学年修養会、などが紹介されている。

それらは機械的に過ごされる場合もあるが、そ

こで起ってくる体験や出会いが、時には生涯を変える意味を持つ場合もある。特に準備に参加して責任を負った生徒達の体験を記せば、私の忘れ難いものだけでも限りなくある。

クリスマスに備えて、中学部の有志を募って『鳴らない鐘』や、『幸せの王子』の大きな絵ばなしを作ったことがある。登場人物を動物にして台本もみんなで作った。あんまり真剣に演じたのを見ていた先生方がほろりとした程だった。その時自ら志願してナレーターをつとめた可愛いおしゃべりさんは、今国際的な同時通訳や司会者として活躍している。

夏期修養会のクライマックスに証しや祈りを含む感動的なキャンプファイヤーをする事の是非をめぐって準備委員が大激論をしたことがあった。感情的な興奮を信仰と取違えてはならないというのが、理性派の高2の委員の主張である。討論は宗教心理学的にも神学的にも甚だ重要な意味を含んでいた。どうしても実施したい生徒達との間に妥協点が見出され、火は最後の夜でなく一日前にたかれた。おわりの日には涙でなく、昨日の経験はなんだったのかという真剣な内容と語りあいがあった。よい修養会だったと思う。

記念祭にRACもよく色々な展示を行ったが、ある年エルサレムの大きな立体模型地図を作った中学生のグループがあった。ボール紙を等高線に従って切抜いては貼り重ねてゆく地味な作業である。寒さと空腹に耐えて遅くなつては週番に叱られ、手もスカートも糊だらけにして、何日も働いた。友達は次々に脱落して最後は2人になった。いよいよ明日展示という晩にようやく出来上がって、先生に報告して2人はいそいそと帰った。ところが、あとから作品を見にいった顧問の先生が大変なことに気づいた。彼女達は苦心して切抜いたボール紙の、重ねるべきものを捨てて、捨てるべき部分を一生懸命積み上げたのである。キデロンの谷は山となり、ゴルゴダの丘は窪地となって

いた。3人の先生が此のピンチを救済するために夜半過ぎまで必死で働いた。然し、先生が完成したのでは展示されるのはあくまでも先生の作であって、子供達の気持は救われぬ。そこで仕上げは翌日に残された。朝、自分たちの失敗を知らされた2人は、ひとしきり泣いたあと、展示場の真ん中で先生や友達に励まされながら午後までかかって完成させたのである。立体地図はこう作るという実演展示は、多くの友達や来客の注目を集めた。絶望から希望へ自分達をたすけだすために見えない所で先生達がしてくれたことを知って彼女たちは自分を人目に曝して更に1日働いたのである。私は残念ながら今この子たちの名前を思いだせないが、此の出来事は忘れない。人間のやる事はどこかで決定的なマイナスがついているかもしれないが、これをカバーして下さるキリストがあることを思い起すからだ。恐らくあの2人も生涯忘れないだろう。こうした予想外の出来事の中にこそ、宗教教育のhidden curriculumがあることを思う。

奉仕活動

子供たちの奉仕活動というもの本当に先方にとって役立つのかどうか場合によっては、迷惑を掛ける事もあるかもしれないが、しかし少なくとも人に尽くしたいと努力することの意義を考えて、教育活動としての慰問奉仕(今日で言うボランティア)に生徒有志とよく出掛けた。

K育児会を訪ねた時、生徒達は雑巾や針箱やエプロンをもっていた。おしめの洗濯でもなんでもするつもりだった。しかし院長(医師)はにこにこして、そういう事は婦人会の人達がやってくれていますから、あなた方は赤ちゃんをだっこして遊んで下さい、といわれた。初め生徒達は子供と思われたと考えてやや不満だったが、話をきいて、親から離された乳児にとってスキンシップの欠けがどんなに問題であるかを知り、一生懸命赤ちゃ

んの相手をしながら人は人との関わりなしには生きられないこと、また自分がどんなに愛され幸せに育ってきたかを学んだことだった。

S療育園では、全く可能性を持たない重度の障害者にあい、疲れきったそのお母さんが「何とか安らかに死なせてやれないものでしょうか」と園長に相談するのを聞いた。命は神さまからの預りものですよとたしなめ励ます園長の話に、人の生きる意味や生命の尊厳は、その人の能力や可能性にあるのではなく、その人を生かし愛する神との関わりにあることを学んだ。そこにサリドマイドの幼児がいく人かいて、訪ねた生徒が抱きあげようとした。ところが両手のない赤ちゃんは生徒の腕の中をすりと抜けて、仰向けざまに床に落ちてしまった。火のついたように泣く障害児を看護婦が急いで連れ去った後、自分の大失敗に真っ青になって口もきけずに涙ぐんだ生徒のショックを私達は心配したが、此の経験はそこにいた生徒たちの人生にある種の方向づけとなったように思われる。その生徒は保育科に進んで、今はベテランの保育者であり、ともにいた他の1人は神学校を卒業して筑豊の子供たちのために働いた。

これらはいわば礼拝堂や教室の外で行われた宗教教育のごく一例である。

相 談 室

「教会を変わりたい」、「洗礼を受けたいがお母さんが反対——」、「教会で会った男のこ——」、というような相談は、宗教主任なら誰でも日常的にうけているはずである。

私が就任して間もないころ、聖書の試験にわざと白紙答案を出した中1の生徒があった。当時教師の中にカウンセリングを学んだ人もなく、誰も

理解できないまま、この子は医者に転地を勧められて転校していった。この経験をきっかけに本気でカウンセリングの学習を始め、2年後、階段の下の物置が相談室になった。

特に信仰上の問題でもないのに「クラス担任を差し置いてこっそり」相談室に行く事を快く思わないむきもあって、理解と協力を得るため職員会でカウンセリングの伝達講習などしたこともあったが、相談室はかなりよく用いられた。これまで宗教活動で接していた人々とは随分違った人間関係を経験して、宗教主任のあり方を反省させられた。おそらく相談室のお蔭で一番恵まれたのは外ならぬ私自身だったと思う。

事柄の性質上、具体的な事は書けないし、大部分は忘れてしまったが、しばしば相談に現れた生徒たちの成人した姿を見掛けたり、元気な活躍ぶりを見聞きするのはやはり嬉しい。

おわりに

宗教教育は、特定の教科によってなされるものではなく、学校全体の生活や雰囲気や人間関係を通して全人的に関わることだから、教師と生徒の人格関係はもとより、教師間のチームワークがとても大切であると思う。私の在任中ひそかに努力したことの一つは、信徒とそうでない人との間に何となく生じがちな溝をできるだけ埋めることだった。組織化された教育の場というものは、急激な変化を嫌うところがあって、特に宗教教育は学校では保守的になりがちだが、多くの日の後に報われることを信じて水の上にパンを投げるような作業を忍耐して続けなければならないとおもっている。(1984.9.16)



短大のキリスト教教育

短期大学宗教主任 十 時 英 二

1954(昭29)年以降の短大におけるキリスト教教育について記すように依頼を受けたが、この期間1960年まで筆者はこれに関わっていないので、提供された資料(芝原主任司書による記録およびジュティーン教授の記憶)に基いて、キリスト教教育に関する部分を整理し記すことにする。

現在、短大のキリスト教教育は、キリスト教に関する正規の授業と年3回ないし4回の全学特別講義という教学の面と、毎日の礼拝、始業礼拝(4月の始業に当って全学で行なう)、クリスマス礼拝、イースター礼拝(イースターが4月にある年のみ行なう)、卒業礼拝、卒業カンファレンス等の行事および聖歌隊等自由参加の活動といういわゆる宗教行事の二つの面で行なわれている。こうした現在の形に一応定着するまでの経緯を歴史的にたどってみることにする。

礼 拝

短大発足当初は学校が礼拝を計画していたが、礼拝は学校が行なうべきであるという考えから両科科長(現主任)が礼拝の計画を行なった。そして礼拝は両科別々に行われた。それは、保育科はキリスト教保育に携わる保育者を養成するという立場から礼拝を必須のこととし、英文科は自由出席としたことによる。しかし、この科別礼拝は週3日で、あとの2日は合同の礼拝とし、短大全体の礼拝の姿勢を守ろうとしている。その後、1本立てとなった。1965年からは毎週水曜日に1時間の礼拝を行なうことになり、この年は12時45分から1時50分まで、翌年からは10時20分から11時30分となった。他の曜日は

10時20分から35分までの15分間をショート・チャペルアワーとした。1969年、東洋英和短大も大学紛争の小型台風の余波を受けた。この紛争の直接の契機となったのは保育専攻科の免許取得の問題であった。やがて、本科の就職問題もからむことになるが、この問題をめぐる学校との交渉の中で「敬神奉仕が空文化しているのではないか、形骸化しているのではないか」、という問に発展した。そして少数の学生はその年の卒業礼拝の場で全学生に訴え、かつ学校側を追求するという手段に出た。そのため、卒業礼拝は行なえなくなった。翌'70年4月から水曜日の全学礼拝のみとなり、毎日の礼拝は行なわれなくなった。この毎日礼拝の中止が紛争の影響によるものであるかどうか明らかではない。1973年石井次郎学長('72年4月着任)の要望により、この毎日礼拝は復活している。'74年より毎週水曜日の全学礼拝とアッセンブリー・アワーは廃止され、年数回の特別礼拝と宗教講演を月曜日7・8時限の特講の時間に行なうことになった。それは全学礼拝の出席者が減少したことが主たる理由で、むしろ特別礼拝を充実して全学で行なう方が意味があると考えた結果である。

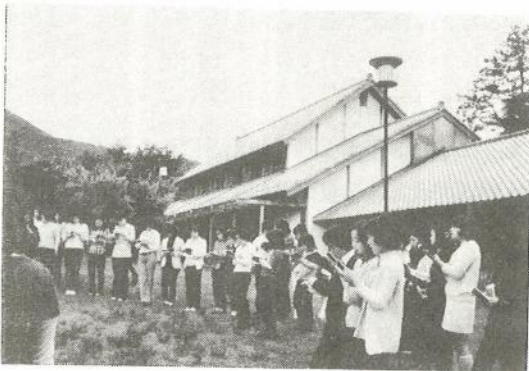
宗教強調週間

1955年11月7日(月)からの週を宗教強調週間とし、3日間連続で毎日午後の平常の授業をなくし、「いかに生きべきか」の主題のもとに講演および協議会を行なった。講師に宮本信之助氏(国立教会牧師)を招いた。'56年は主題「人生のよりどころを何に求めるか」講師・高木幹太氏、石居英一郎氏。この宗教強調週間は6年間続

けられ、1960年をもって終わっている。

修養会・カンファレンス

1954年3月14、15日卒業修養会を保育科2年は五日市青年の家で、英専は天城山荘で行なっている。この年は英文科の発足した年で、2年生はいなかったわけで、翌'55年保2、英2それぞれに修養会を行なっている。'56年には保育科のため宗教部修養会が6月に浴思館（小金井）で行なわれ、退修会の名で英2は10月に天城山荘、保2は3月に真鶴YMCAの家で行なっている。'58年より英保合同の全学修養会が実施されることになり、6月12、13日東山荘で行なっている。修養会のしおりも作られるようになったが、この年の持参品の項に「しおり」などのほか米3合とあるのは何のためであろうか。'61年から全学修養会は再び科別となり、会場は同一であるが日程をずらして行なっている。'63年度は修養会ラッシュで、6月3日保専、18、19日保育科と英専、27、28日英文科、そして2月28日に卒業修養会が行なわれている。修養会の名称は'68、'69年にはリトリート、'70～'72年はカンファレンス、'73年以降入学時のオリエンテーション、カンファレンスと卒業カンファレンスという現在まで続くパターンが出来上った。'72年度のカンファレンスに当り教授会は(1)カンファレンスは本学における宗教活動の一環である。



短大・カンファレンス 早天礼拝（天城山荘にて）

(2)担当は宗教部であるが、教育の一環として両科主任がこれを助け、学生生活部長もこれを手伝う、(3)企画担当者は宗教主任であるという3点を確認した。

以上を振り返ってみると、修養会は科別、合同、全学、学年別というように、その時々状況に応じて行なわれたことがわかる。現在の形は両科合同、学年別ということに定着している。なお第1回以来使用された会場は、五日市青年の家、天城山荘、浴思館、真鶴YMCA、東山荘、箱根松坂屋、星野温泉ホテル、塩壺温泉、大磯アカデミーハウス、大学セミナーハウス（八王子）、敷島館（湯河原）、国立婦人会館で、天城山荘と東山荘が最も多く用いられている。

キリスト教の授業

キリスト教の概論に関する講義は一般教育科目の中で行なわれ、必修科目とされている。1962年以降はカリキュラムと講義内容が保存されているが、それ以前の資料は断片的で正確を期し難しい。遺漏があるかも知れないが、後日補填していくことにしてこの期間はわかっているものだけを記すことにする。

創設当初は「英語宗教」F.G.ハミルトン、「倫理」「宗教」「基督教概論」奥興、「倫理」武藤健、「宗教」M.F.スクルトン、「倫理」「基督教概論」高木幹太という担当である。「宗教」という科目の内容は「キリスト教概論」であろうし、「倫理」は「キリスト教倫理」が主たる内容であったと推測される。1962年以降は「聖書」と「キリスト教概論」の二つの科目名となり、専任教員のほか多くの非常勤講師の協力を得て講義が行なわれている。

入門的内容の必修科目のほかに、やや高度な内容のキリスト教の講義も幾つか行なわれている。この他専門科目として「キリスト教教育」「キリスト教保育」「宗教心理学」などの講義も行なわ

東洋英和女学院短期大学

昭和57年度 卒業礼拝

司会 田島 信之
奏楽 飯島千雅子

若い人はどうしておのが道を
清く保つことができるでしょうか

前 奏

招 詞

司会者

讃美歌 77

一 同

聖 書 詩篇119篇9-16節

司会者

祈 禱

司会者

合 唱 「山を見上げよ(詩篇121篇)」 聖歌隊
メンデルスゾーン

説 教 「この道を行く」

十時英二

讃美歌 288

一 同

日時： 1983年3月14日(月)

午前9時30分

祝 禱

後 奏

場所： 本学講堂

れている。

宗教部・宗教委員会・宗教主任

当初は宣教師たちがキリスト教教育の責任を担っていた。すなわちF.G.ハミルトン、M.F.スクルトン、S.M.ジュティーン、M.E.マシューソン、E.G.サティーらである。1961年に専任の宗教主任が置かれることになり、S.M.ジュティーンが就任した。'70年4月伊藤之雄が宗教主任に着任するが、その際、宗教主任は両科の科会に出席権と発言権をもつということが決められた。しかし着任後まもなく伊藤教授は病を得て欠席がちになり、それを補うために'72年9月、宗教委員会が設けられてキリスト教教育の企画運営に当ることになった。この委員会はジュティーン教授が委員長となり、両科から各1名選出された計3名で組織された。'75年に宗教委員会はキリスト教教育委員会となり、規約が定められた。それによると、この委員会は「本学の宗教教育に関する基本的な問題を研究し、そ

のカリキュラムを討議検討する。」また「礼拝等キリスト教教育の具体的なプログラムを考案し、教授会の議を経てその実施をはかる」とある。したがってこの委員会は宗教行事のみでなく、キリスト教教育の教科にもかなりの責任を負ったことが伺える。また「委員長は宗教主任がこれに当る」と定められているが、ジュティーン、伊藤両教授の健康上の理由から、'78、'79年は岡田磐教授が委員長となった。1980年私(十時英二)が宗教主任として着任した。そして、'84年度から



短大 卒業礼拝 聖歌隊合唱

は宗教部委員会が設けられた。これは、この年から改訂された短大規定に基づき学生部委員会、教務委員会と並べて宗教部委員会という組織になったもので、その内容は従来のキリスト教教育委員会とほぼ同一のものである。ただキリスト教学のカリキュラムに関しては、一般教育の枠内で考えることとし、宗教部委員会の取扱い事項から除外した。宗教部には'81年度から週3日の嘱託ではあるが、職員が置かれることになった。これによって学生への働きかけが巾広く行なえるようになった。その一つに「宗教部だより」の発行がある。

刊 行 物

学生の自主的な活動に、学生の宗教部と学生YWCA（通称学Y）とがあった。これら学生の活動についてはあらためて資料を調べねばならないが、手元にある刊行物について記すと、1957年に「宗教部部報」No.1が発行された。奥付に短期大学宗教部発行とあるが、これは学生のグループである宗教部のことである。'58年の第2号たるべきものは「かえで」No.8に統合されている。

「かえで」はNo.7以前入手できないが、これも宗教部発行の機関紙である。この間の経緯は不明である。一方YMCAでは'61年に、機関誌「イヌエンジュ」を発行、第1号から第5号（'65年）は保存されている。イヌエンジュは「何百年たっても朽ちない木」と扉に記されている。

学校の宗教部の文書活動として発行されているのは1981年以降の「宗教部だより」で現在21号をかぞえている。

聖 歌 隊

学Yの人たちが中心になって聖歌隊を組織し、大中寅二先生に指導を仰いだ。その後保育科長尾寿晃講師が指導に当り、1960年代には毎年クリスマス礼拝に奉仕をしている。その後、'74年飯島千雍子講師（現助教授）が着任し、聖歌隊は学生の自由的参加によって組織されているが、クラブ活動と異なり、短大宗教部に所属している団体である。創立100周年記念レコードのために奉仕したことは、ふさわしいことであった。

創 立 1 0 0 周 年 記 念 行 事 予 定

行 事	日 時	場 所
中高 新校舎・体育館竣工式	9月5日(木) 2:00～	新校舎 体育館・集会室
か え で 祭 学 芸 会	短大11月2～3日 中高10月8～11日 小11月1～2日	短大・校舎 中高・校舎 小・校舎
記 念 礼 拜	11月5日(月) 10:00～	合同小学部校庭
記 念 式 典	11月6日(火) 1:30～	中高体育館集会室
記 念 講 演 会	11月7日(水) 2:00	中高講堂
東光会 記念 祝賀会	11月8日(木) 1:30～	中 高
全院教職員協議会 第三年次	11月22日(木)	未 定
記 念 音 楽 会	12月6日(木)	人見記念講堂
教 職 員 祝 会	12月21日(金) 6:00～	学 外
その他の行事		展示等

あ と が き

創立100周年を迎えることが出来、主の恵みと導きに深い感動を覚えます。史料室委員会が発足して9年余、多くの方々の祈りの中に歩んできました。特に奥先生、水野先生には、御多忙の中を喜んで御寄稿いただきましてありがとうございました。

（小学部 木口・竹井）